

明治

42-1



みづゑ 第四十六要目

己酉新年(水彩畫原色版).....	丸山晚霞
ラスキンの山岳論(一).....	小島烏水
沼津の富士(水彩畫寫真版).....	大下藤次郎
鷄に就て.....	丸山晚霞
マクワーター氏の初學心得.....	石川欽一郎
會津燧岳(水彩畫原色版).....	大下藤次郎
圖按法概要(五).....	比奈地畔川
雪について.....	大下藤次郎
水仙花(圖按畫石版).....	寺田季一
ナシヨナルギヤラリ.....	汀 鷗
秋季寫生會の第二日第三日.....	白 鷗
水彩畫の繪具.....	東京の彩料相場
者の領分.....	寫真版等
	寄書.....
	問答.....
	讀

正 賀

己酉元旦

河合新藏
 眞野紀太郎
 丸山晚霞
 永地秀太
 大橋正堯
 鷓澤四丁
 森脇英雄
 望月俊陵
 大下藤次郎





みづゑ

第四十六

明治四十二年一月三日（發兌）

ラスキンの山岳論（山岳會第一大會講演）

小島 烏水

〔一〕

今日は山岳會大會の第一回で、私は其第一席でありますから、實は何か特殊の山岳の事に付いて細かい御話をしやうと思ひましたが、第一席のことではあるし、況して第一日のことでもありますから、山岳概論、さう云つた性質のものが宜からうと云ふので、ジョン、ラスキンの『近世畫家論』の中の山岳論に付て、少しく清聴を瀆さうと思ひます、此ラスキンの名著は諸君が多く御愛讀になつて居られるであらうと思ひます、さう云ふ御方には一向新しく無いことを申上げて、甚だ恐縮であります、暫く御許しを願ひたいと思ひます。

其前にジョン、ラスキンと云ふ人の略傳をちよつと申上げて置きます、此人は千八百十九年、日本の文政二年に倫敦に生まれました、それから千八百四十二年二十四歳の時にオックスフォード大學を卒業して、翌年ラスキンが二十五歳の時に有名な『近世畫家論』の第一巻を著はしました、それで一躍ビクトリヤ王朝最後の文豪の列に這入りましたがその後も頗る名著を續出しまして、ラスキンの文界の位置が定まつた、四十六歳の時にラスキンは阿父さんに死なれた、此阿父さんは却々商業の上手な人であつた爲に、死なれた時には土地家屋其他で百六十萬圓の財産を遺されました、其時分の百六十萬圓は金の方が高くて、物品が廉かつたから可なり富と言つても宜からうと思ひます、それからラスキンが五十三の時に又阿母さんに死なれた、ラスキンと云ふ人は其時分にはもう細君が無かつたので、子も何にも無い、そこで親讓りの財

産と云ふものは、美術品を購入し、又秀才の教育費にするとか、或は大學に寄附するとか、勞働者の組合に投ずると云ふやうなことをして残らず蕩盡して仕舞つて、一文も自分の手に残さなかつた、詰り皆な美術保護とか、育英資金とか公共事業に寄附して仕舞つたのであります。千八百八十九年から千八百九十九年まで、此十年間はラスキンの晩年になつて、さすがに氣力旺盛の人も、すつかり耄碌して仕舞つて、實世間から全く遠かつておました、千八百九十九年、即ち明治三十二年はラスキンの八十歳に當りましてその誕生日には、英國の皇族は固よりオツクスフォルド大學、倫敦ラスキン、ソサイエチイ其他有らゆる名士が集つて此世界の文豪の爲に盛大なる祝賀をされました、而して其翌年千九百年の一月十八日にラスキンは格別病氣もせずして、八十一歳の高齢でポツクリと枯木のおのづと折れるやうに死んで仕舞ひました、それでラスキンが生前の希望に依つて蘇格士蘭に葬りました、蘇格士生れて有名の小説家ウラルター、スコット、彼の人の半身像の建つて居る前にラスキンの銅像が建つて居ると云ふことを聞きます、先づ簡單にラスキンの一生涯を述べると是だけであります。ラスキンが二十五歳にして『近世畫家論』第一卷を著して以來、五十年間と云ふものは有らゆる藝術社會、又實社會に涉つて著述をし、講演をしました、山、川、湖、水、寺院、建築、繪畫、彫刻、音樂、經濟、教育、詩、文學、歴史、神話、社會學、道德等の諸問題に亘つて洪水のやうに說教を浴びせかけました、その著作が八十幾種と云ふものがある、極小さい折に觸れての著述は數知れないほどであるが、纏まつた著述がそれだけある、そして孰れも名文であります、其中今日取出して御話したいのは、自然の風景、殊に山岳美を讚嘆せられたことと、此一事に付ては、世界に於て恐らく今まで前に人無く、後に繼ぐ者があらうとも覺えずと云ふ勢ひである、で、ラスキンが何故山が好きであつたかと云ふことを御話するに付て、ラスキンの性行を前以て少しく御話をして置きますが、ラスキンの生れたのは前に述べた倫敦であります、系統は純然たるスコツチ中のスコツチである、阿母さんが蘇格蘭人、阿父さんも蘇格蘭人である、蘇格蘭は御承知の通り、英國に在つても山水明媚の郷さとで、昔田園詩人としてバアンズなど、云ふ人が

出ました、それから後ウヲルター、スコツトあの『湖上美人』で有名の詩人が出た、ラスキンは夫等の先輩の感化を受けて居ると見えて、非常に子供の時分から「自然」が好きであつた、ラスキンの阿父さんは七十九歳阿母さんは九十歳、ラスキンは八十一歳で死んだ、實際孰れも高齢であつた、而してそれはラスキン一家の系統が長壽を保つ方であつたからでせうが、少くとも、ラスキン一人にあつては自然を好み、又藝術に非常に趣味を有つて居つた爲に、長生をした、と言はれないことはあるまいと思ひます、どうも株屋や、裁判官、辯護士銀行員などいふ商賣では、あまり長生をする者が無いやうであります。

ラスキンが、子供のうち中から山岳が好きであつたと云ふ例を御話しますと、丁度ラスキンが四歳の時にロイヤル、アカデミイの會員で、ノースコートといふ人に肖像を描いてもらった、ノースコートは可愛らしくかしこまつてゐる小兒に向つて、後ろの景色は何にしたら宜からうと云ふとラスキンは青い山が宜いと斯う答へた、何しろ、四歳の小兒であるから、偶然に出たのかも知れぬが、何となく將來の運命を豫言したやうに思はれる、十歳になつて阿父さん、阿母さんに連れられて例の大ナポレヨンの敗戦で有名なウオーターローの戦場へ旅行に往つた、十歳のラスキンは其時分既に文豪としての芽生へを示してゐたから、忽ち感じて、詩を作つた、其中なかに斯う云ふことが言つてある、記憶に残つた儘を申しますが、ヴオーターローの戦場には戦没將士の紀念塔がある、佛蘭西軍にも聯合軍方にも建つて店る、其紀念塔と、後ろの山とを少年のラスキンは比較して、「人間の建てた山と云ふものは、一寸法師いっすんぼうしみたいな紀念塔だ、自然の作つた紀念塔と云ふものはあゝ云ふ山である、」ちよつとしても自然崇拜はこの時分から其氣があつた、所が十四歳の時に阿父さんが一粒種のラスキンを、エライ者に仕立てたいと云ふので、金の有るに任せて始終旅行に連れて實物教育をして歩いた、そのとき瑞西へ始めて往つた、ライン河を渡つてブラツク、フオレストを通過して、瑞西に往つた時、ラスキンは始めてアルプスの雪を戴いて店る景色を見て躍り上つて非常に喜んだ、ラスキンはアルプスに四十何回か旅行をしたが、この十四歳の時に初めて高山の雪を見て印象を興へられた程深く感

じたことは後には無かつたと言つてゐる、この事は、晩年に著はした「ブレテリタ」といふ自傳に書いてあります。十五歳のとき、博物學雜誌に地質上の一論文を投じたところが、其雜誌の主筆が、阿父さんに手紙を寄せて、あなたと、私とが、目を瞑るころに、お子息さんは大立物になりますよと、言つてよこした、併しそれまで待つには及ばなかつた。

それから今の『近世畫家論』第一卷を公けにした翌年五月、ラスキンが二十六歳の時に、瑞西に第五回の旅行を試みた、其時はアルプス中の最高峰、モンブランと、その氷河を研究した、其時日本で謂ふ剛力向ふで謂ふガイドでクレーテツトといふ老人が案内をした、この老人はラスキンの手を取るやうにして自然の觀方を教へた、ラスキンは此人に仕込まれて、餘程岩石や、氷河や、其他山の雪のことを研究したのである、後にラスキンは畫家を對手にして繪畫の議論をする程であつたから、隨分繪も自分で描いた、就中岩石、氷河などの繪は、専門家の到底及ばざる程の智識を有つて居たのであるから、技倆も殊に秀れてゐた、其翌千八百四十五年『近世畫家論』第二卷を著す前に、最う一度モンブランに觀察に往つた、其時まで、自分は詩人にならうと云ふ考であつたが、どうしてもラスキンの思想は、韻文といふやうな窮窟の鑄型には入られない、やはり得意の散文で、天然の美を描寫するに限ると云ふ考へを起した、『近世畫家論』第二卷が出てから、又アルプスに往つた時に、斯う云ふことを感じた、『心を純潔にし、考を嚴肅にするには、實に宇宙間、山に若くものは無い』といひ、『明日はモンブランに向つて、眞ッ直に馬を向ける樂しさを思へば、心臓の鼓動を覺えない』と言つてあるラスキンはワーズワースと同じく、雪解の水を愛し、シエレイと同じく、碧い空が好きであつた、ラスキンはこのやうにして屢ば瑞西へ往つた、餘程瑞西の山國が好きであつたと見えて、一時は繪入の瑞西の歴史を作らうとまで思つたが、『近世畫家論』の續稿とそれから其他色々の著述ができました爲に、到頭腹案の儘で葬むられて仕舞つて、さう云ふ本は出さなかつたのである、此外にも腹案の儘で世に出さずに了つた本は、澤山有つたと云ふこととてございます。(つづく)

雞に就て

丸山 晚霞

酉年に因んで雞の所感を書て見やう、古來雞は詩題畫題に上つて、若仲の如きは専門に研究した、應擧の雞の畫等は殊に有名である。吾帝國の歴史を溯ると皇祖太神が天岩戸に隠れませしとき、世は常闇となりけるを、長鳴鳥の聲に應じて岩戸は開かれ、常世の起原はこゝに始まつたので、雞はこの當時より居つたもので、世界を通じて雞は人間と離るゝ事の出来ない關係を持つて居るのであらふ。

雞が詩題畫題となるは、泰平。無事。平穩。平和等の感じを現はす上に詠じたり描かれたりしてゐる。洪平齋が人家の詩に、林深路轉午雞鳴 知有人家住隔溪 一搗闌紅春色動 酒帘直在杏花西。范石湖の詩に、柳花深巷午雞聲 桑葉尖新綠未成 坐睡覺來無一事 滿窓晴日看蠶生。陶淵明の歸田園居の詩の一節に、狗吠深巷中 雞鳴桑樹顛。其の他の詩句に、桃李花間雞犬聲 雞鳴紅霞裡 雞鳴柳絮飄等何れも平和なる田園の感じを歌ふて居る。俳句和歌はいふまでも無く、西洋にありても雞の詩題畫題に上るものは東洋と全じてある、ミレー又はモーブの田園生活の畫、其他田園詩人は何れも描寫して居る。田園に興味を有して居る自分は雞を好愛して居る、雞の聲を聞くと田舎を思ひ、田舎の畫に雞が無いと何となく物足らぬ感が起る、田園は何時も平和の氣が満ちて居るが、彼等の尤も活動する盛夏にありては、こゝも意味の異なる喧擾を極め居る、この點に於て比較的雞鳴や雞の添景が眼立たぬ、されど人々は皆耕しの野に出て、留守をまもる老嫗や犬や、さては雞の群が清翠滴る木蔭に眠れる光景は平和の感の好材料である、平和なる田園を畫題として、雞を添景として好適なるは春が尤も調和して居る、桃苑麥隴の間に藁舎あり、菜花二三そこに黄金を點じ、赤冠黑白の雞群と、機杼の乙女兒守の老嫗を配したらんには、如何に平靜なる溫和なる畫題ではないか。薰り深き春の夜は、雞鳴に明け、淡紫の曉色炊烟深き香霞、遠近の村落より雞鳴を聞きし感は如何芳樹閑花茅舎見え、一聲の雞鳴風無きに飛花亂るゝ感は如何、更に秋の田舎にありて秋穫の庭に群るゝ雞、

霜又は承露の庭に楓の根を印するもの、落葉の中をガサガサと食求るもの、霜枯れし芭蕉野菊の亂れし籬邊、南天の實赤き藁舎の隅、山茶花咲きて柑橘の黄熟せる竹舎、喧を避けたる隱士が柴扉のもと、殘柿赤き稻むらの畑、曉發遠村雞鳴等、皆これ平和を現す好畫題である。

立料山の偃松帶や、淺間山北面熔岩帶に露宿すると、曉明の頃靈雞が鳴くとの事、前者に宿りしときは聞かなかつたが、後者に宿りしときは慥かに聞いたのである、何處で鳴くといふて指摘する事は出来ない、空で鳴く如く、地中で鳴く如く、一種の靈氣に襲はる様な氣がした、余は靈雞と信じ詩的に味ふて居つた、其後或學者にこれを語ると、靈雞でも何でも無い、信州は高原で空氣が透明して居るから、遠い村落で鳴たのが聞えたのである、殊に動物の聲で遠音に響くものは雞に續くものは無い、遠くに送る電話で人間の聲は届かなくも、その附近で鳴た雞の聲は判明に通じた等と余分の説明までしてくれた、これは學說として間違ひはあるまい、されど美感を科學的に説明すると畫も詩も出來なくなる、自分は矢張り今も尙靈雞として深くは味はつて居る。

(了)

水彩畫の繪具 (その一)

水彩畫の繪具には、練製と乾製と粉末のと三種がある、練製はモイストカラーとよばれて、錫の筒(チユーブ)入りと小なる陶器(パンツ)入りとの二種ある、乾製(ケーキ)は長方形の固形體であつて、練製も乾製も大小二種ある。粉末製は小さな壘入りで、アラビヤゴムに溶いて用ひるもので、普通の場合には使用せぬ。繪具は以上の如く三種に分れてゐるが、價は皆同一である(色によつて其價に差異あれど)、量が一番ケーキが多く、パンツは少ない。

専門家は多くチユーブを用ゐる、パレットの上に入用丈け出すのに至極便利であるが、繪具が古いと硬くなつて筒の口から出なくなる、それ故コバルトとかインヂゴとか、常に多量に用ゐる繪具のほかは、小形のを買つて置くとよい、そして買ふ時押して見て硬くないのを選ぶがよい。

マクワーター氏初學心得

石川欽一郎

マクワーター氏は英國ロイアルカデミー正會員にして風景畫の大家なり。イースト氏は温健の畫風を以て鳴り。マクワーター氏は優艶の筆を以て賞せらる。左に氏が近著水彩風景畫帖より初學の心得を抄譯すべし。

常に手帖を携帶すべし。記憶力は中々急には養成されるものに非らず。今見る佳絶の光景はいざ寫さんとする中には忽ち消へ失す可ければ。此の如き場合には先づ之を手帖に覺へがきして。後に我記憶より畫くの外なし。

時間なき爲め輪廓を取り又た繪具を塗ると云ふ兩方は出来難き場合には。先づ輪廓だけを丁寧に取りつて置き。色彩の關係が我記憶より消へざる内に其の輪廓の上か又は別の紙かに繪具にて畫くべし。此方法にて練習積まば遂には我が目撃したる種々なる光景。佳麗なる事物を心の眼の前に現出するを得るに至るべし。

模寫と云ふことは敢て之を獎勵せざる考へなり。模寫のみを事とすれば他人の眼を借りて自然に對すると云ふ嫌あるべし。凡て自分は自分の考で見ざる可からず。獨立獨行して遂に失敗するとも。他人の驥尾にのみ附隨するに比すれば寧ろ優ること數等なるべし。然れども先輩大家の作品を熟視して深く其妙所を會得することは無論有益なるのみならず。世の名品傑作に接して其各部を模寫し。以て大家が遺風を探究することは益こそあれ毫も害あらず。例へばターナー筆「霜深き朝」の前景の如き。又た同畫家筆「ハロイドの行脚」渡頭「バイエーの入海」等の遠景の如き。皆模寫に好きものにして何れもトラファルガー、スクエアのナシヨナル、ギアラリーに陳列しあり。其他ミレイス筆「盲目娘」オフエリアの二圖に於て。其かきこなしの妙と空氣の工合。殊に「オフエリア」の方の薔薇の植込と柳とは。或は水彩畫にては模寫難からんとも須らく試

むべく。又同畫家筆「尼が墓を掘る圖」の背景も亦模寫の好材料なり。「盲目娘」はパーミングハムのコーポレーシヨン、ギアラリーに。「オフエリア」と「尼」の二圖はテート、ギアラリーに何れも陳列しあり。

右兩大家の妙處を探究し盡さんことは中々容易ならずと雖も。先づターナーより學ぶべきは。光と空氣及び山や雲の畫法にあり。ミレイスよりは何として凡て學ばざるはなし。此畫家の作は皆健全にして何れも愛すべし。「薄寒き十月」等の風景畫の如き。其感想は凡て詩的なると共に併かも自然より受けたる忠實にして且づ杜撰ならざる手法を以てせり。然れども此畫家の風景畫の傑作としては。前に挙げたる如き人物畫の背景に多く之を見るべし。

風景畫家は皆生れながらにして記臆力に富めるものなれども尙且つ之を養成開發するの要あれば。前に述べし如く迅速に覺書を取るの方法を練習すべし。或は時に數日若くは數週間一本の樹の前に座し。力一杯其美しき有様や巨細の趣を寫生するも可なり。草。苔は勿論。棒千切。柔らかや硬き石。岩等をも畫くべし。殊に花を研究すべし。花瓶に挿したるものでなく庭や路傍或ひは山路に咲ける花を畫くなり。花と云ふ中には無論葉なども含むなり。此の如くして手帖に練習を積み。又た雲や山等をも研究する中漸やく我能力も發達し。終には一度見た景色と少しも違はず其感じの儘に畫くを得るに至るべし。感じを畫くと云ふこと即ち印象派に二種あり。即ち只大體の漠たる印象に依れるが如き一派(尤も此派の作品中には甚だ興味あるものもあり)と又たそれよりも更に有力なる印象に依り。他の印象派が見たる處は皆之を見たる其上に猶色彩や細部分の關係。物質の状態等をも悉く記臆して之を描出すると云ふ一派なり。ターナーは風景畫に於て印象派中獨歩の大家なりとす。

時としては畫家が如何にして出來たか自分にも分らぬ内に傑作が仕上ることあり。要するに一枚たりとも研究の作ならざる可からず。

洪水。激流の如きは一氣に筆を走らす時は其急奔の勢を助くべし。風に飛ぶ暮雲。其他急速に動く物體は

皆此筆法にて畫べし。木の枝。葉。花等には風に揺らるゝ場合の外はかく急速に筆を用ゆるの要なきなり。白を用ゆる場合は。光を烈しく現はす時か。若くは畫を強く畫かんとする時にあり。例へば青空若くば曇れる空に黄色の葉を畫かんとする時には。先づ樹木を白のみにて畫き。乾いてから黄色を其上に掛ければ少しも色の透明を失ふことなく。白を用ゆる上に於て之れ最良の方法なりとす。白を用ゆるも變色の憂なし。併し一般初學者の爲めには白を用ゐず凡て透明色のみにて畫くを可とす。之は色が濁ることなく又た重くならざるが故なり。(終)

水彩畫の繪具 (その二)

陶器入の練製も硬くなる恐れがある、これも大形と小形とあるから、多く用ゐぬものは小形のを求めたらいよい。
乾製繪具は、種類によつて其儘繪具箱へ入れて置いて、筆の先で充分溶けるのもあるが、中には硬くして始末にゆげぬのもある、尤も期節にもよるので、春夏の候、空氣に濕氣の多い時分には大抵軟らかになつてゐる。

乾製繪具を練製と同じように軟らかにするには、茶碗か盃の中へ入れ、熱き湯をヒタ／＼に入れて半日程置くと、心まで軟らかになる、その時湯を捨て、グリスリンを少し入れ練つて置き、入用の時繪具箱なりパレットへなり少しづつ出すのである。このグリセリンを入れる量が一寸加減もので、總じて透明質の繪具、殊にクリムソクレキやフーカスグリーンの如きは流れ出す憂があるから、ほんの少し入れる、コバルトやエロイオクルのやうな色は澤山グリセリンを入れても差支ない。

繪具の良否は製造會社によつて定むることも出来るが、變色する繪具は其價の高下に拘はらず如何ともすることが出来ぬ、廉價の繪具で不變色なものもあり、高價にしてやはり廉價のものと同様に變色するものもある。

多くの會社の製造される繪具には、普通美術家用と學生用とある、時として學生用の、安物計り作る家もあり、又美術家用ばかり造る家もある。

日本に輸入されてゐるものは、佛國製ではブランシ會社製の大小チューブ、陶器入、ケーキ、並びに繪具箱で、次には英國のニュートン製が盛んに來てゐる、關西ではロンドンのローニー會社の分で、學生用チューブが多く、近頃は森親子商會で、同じくロンドンのラファエル會社の美術家用チューブを取よせられた。近くに文房堂及び大阪の吉村で、ロンドンのニューマン會社の美術家用を取よせることになつてゐる。

圖按法概要

〔五〕 圖按の應用と智識

比奈地畔川

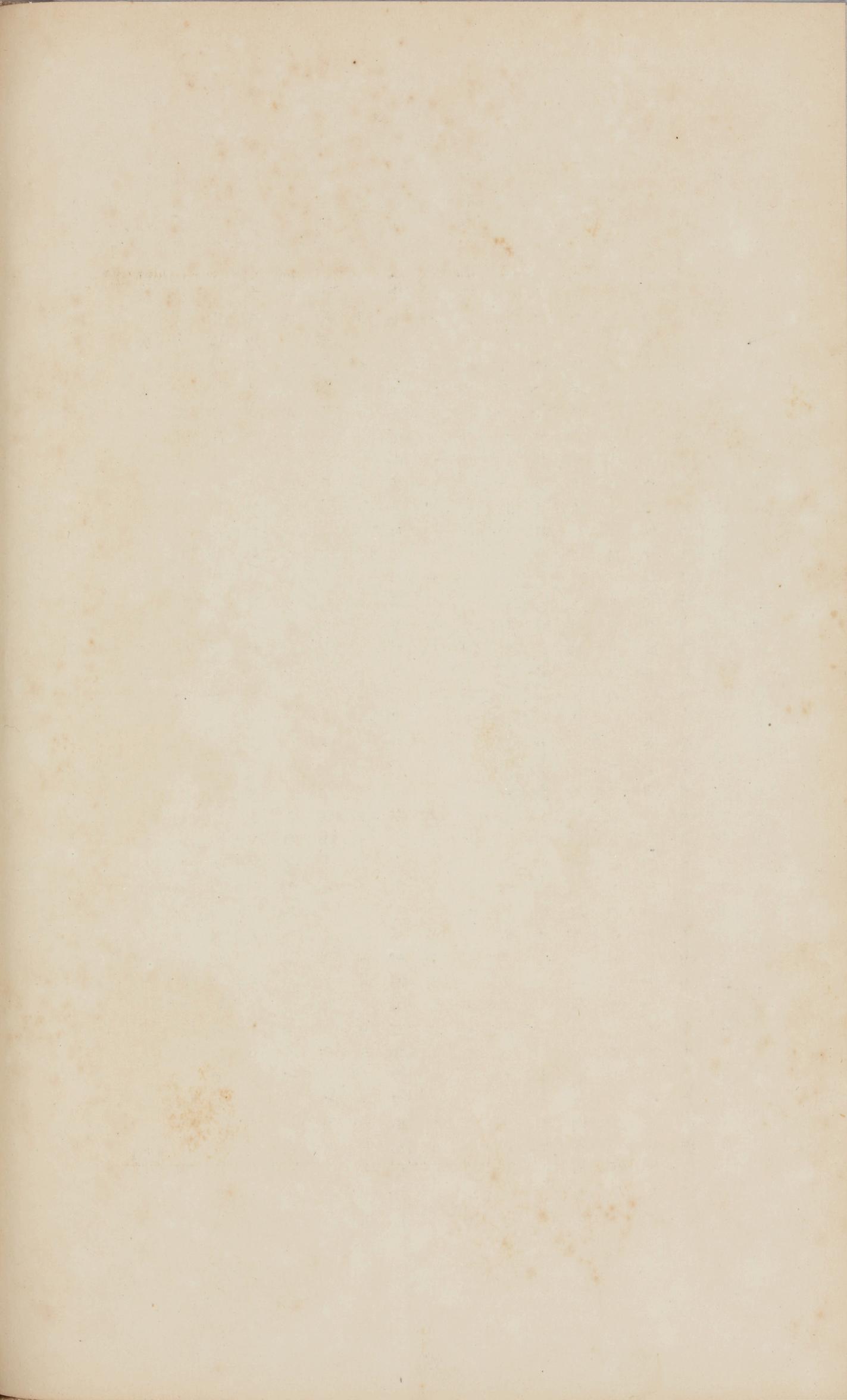
大古蒙昧の人種でも亦如何なる邦國にあつても、他の藝術に先つて模様意匠の様なものが発達して居るのは其揆を一にして居る、勿論未開の人種にあつては、一般の智識がそれ等のものに應用するところも極めて幼稚拙劣なものであるけれども、兎に角自己の身邊を飾るもの、日用の什器武器等には相應の裝飾がある、無論千篇一律の紋様を配置してあつて、色彩なども極く單純なものが多い模様としても曲線の應用よりも直線が多く、自在畫的よりも幾何學的になされたものが多分を占めて居る、或はまた自然その物を其儘採つて直ちに應用したものがあつて、植物の花とか葉とか果實などをそのまま應用したるもの、又た獸類の毛皮牙角などを用ふるものである、是等は時に意表に出て、今人の目にも珍奇の感がせぬではない、兎に角一種特有の能力を發揮して居る、これ等は各人種の特質、土地、習慣、氣候、宗教、迷信、生活の状態、交通の如何等によつて自然に異なるのである、それが人智の發達や交通の如何によつて非常な發達と推移とを來して、其時とを比較すれば應用の範圍も實に廣大して、精巧なるもの、貴重なるもの、或は簡便なるもの、纖巧なるもの等實に非常な勢力を以て増加し來つたのである、故に昔時の舊套を墨守しては居られぬ、ましてや商工業の發達は實に偉大な關係を圖按に及ぼして、換言すれば圖按の善惡巧拙によつて工藝品の商業的消長にまで關係する有様となつた圖按に對する智識の程度といふことも亦考へなくてはならぬ事になつた。

さて圖按に應用せらるゝ資料は何が最も廣く應用せらるゝやと問はゞ、誰しもそれは自然そのものであると答ふるに躊躇せぬものはあるまい。

然り自然に相違ない、今更ら自然の感應、自然の効果を解く必要はない。

圖按が應用せらるゝ大部分は自然、或は自然を資料として、それ等の形狀、或は色彩を模倣して一ツのもの





を形作るに他ならぬ、自然が如何に一般の藝術家に與ふる効蹟の無量劫なるかは到底筆紙などのよく盡す處でない。

然れども、圖按は決して擅まゝに空想に想へて氣儘に筆端に表はせし處の繪畫とは違ふ、これは前項にも述べた通り、特種の美術であるが故に、其製作上の智識に鞏固なる根底を定めて按を立てなくてはならぬ、そしてその智識と技能を養ふには絶対に自然の觀察と學科との研究に相應の修養を積まねばならぬ。試に泰西の圖按教育法なるものを見ると實に到れるものである、それは繪畫の研究(油畫等)と同じくデッサンの素描を作るのである、それは石膏人體の研究に數年或は十數年を費し、並びに動植物の特質の科學的研究解剖色彩學の研究等に根底を作り十年數十年の間に之を盡すといふのである、然も各專間の圖按家を養成し、一事一物に付ての圖按をどこまでもやるのである、日本の様に印刷物の圖按も、染織物の圖按も、乃至磁陶金屬木工等の圖按迄も一の考按者が按出するやうなことはしない、無論近時の日本もそれ程ではないけれども、泰西のそれよりは一層專間的に非常な精巧珍奇なるものを得んとしつゝある、たとへ美術的の圖按にしても工業的の圖按にしても、同一の手によつて完美なるものを得んとしてもそれは無理な注文と云はねばならない、一體日本には今てこそ二三の專間に圖按を教育する學校もあるけれども一般にあつては徒弟的に技術者を教ゆるが故に、僅かに我が師が技術の模倣によつて、あるものを得んとしつゝあるが故に、到底非常の天才にあらざる限りはより以上なものとは出來ないのである、一體何の藝術でもさうであるけれども、技術者の品性なるものは必ず一作物の上にある面影を傳へる、即ち個人性なるものが表はれる、それが自然作者の腦中に高雅優麗な氣韻を有して居らなかつたら、必ずその作品は目にこそ美しくしくても到底價值あるものとは云へない、また必ず立派なものとは出來ない道理である、故に圖按家は頭腦を使用すると同時に、頭腦を養成しなくてはならない、智識を應用すると同時に品性を高くしなくてはならない、非凡なものは非凡なるものがあつて初めて出來るのである。(此項未完)(禁轉載)

日本製では村田と花廼屋といふのが有名である、其他にも安繪具を造る處は澤山あるらしい。

右に擧げた會社うちで、吾々が知れるかぎりで一番信用してよいのはニューマン製である、ニューマンといふ繪具屋はロンドンの老舗で、何百年續いてゐるといふて威張てゐるので、店の様子など何の粧飾もなく、品物も澤山並んではゐないが、奥には大したものがある、そしてその商業のやり方も極々質實でこれ迄あまり外國へ品物を出さぬ、隨てまだ日本へも來ていないのであるが、タトエはチューブ入りの繪具として、他の會社の分は大仕掛けに器械の力で繪具を混せて詰めるが、ニューマンでは手で練るのだ、甚だ舊式のやり方ではあるが、それが爲めにムラが出來ぬ、他の會社の繪具は、チューブから押出すと初めに水が出て後に繪具が固まつて出たり、またフिकासグリーンのやうな混合色は、黄と青と別々になつてゐたりするが、この會社の分は決してそんな事はない、それ等を特色とすべきで、隨て英國の畫家は多く此家の品を使用するとの事である、そして此會社へ、繪具なり其他の道具なり注文する時、畫家であると言ふてやれば定價の三分の一を割引してくれる、この會社の商標は王冠印である。

ニュートン會社は前者と異つて居るが大仕掛けで、店が、りも堂々たるものである、そして盛んに外國へ輸出する、元來獅子の印を商標としてゐた處、花廼家で不徳義にも同じ商標を登録したため、一時無印で來てゐたが、近來日本へ送る分だけトカゲの印をつけることになつた。

繪具は美術家用と學生用と二種ある、價はニューマンと同様であるが、コバルトの如きは三分一程高價についてゐる、そしてニューマンよりは種類が少ないやうだ、例へばニューマンでは、レモンエローにライト、ミツドル、デュープと三通りあるが、ニュートンはたゞ一通りといふやうに複雑ではない、此家では畫家を名乗つてゆくと定價の四分の一を割引する。（つゞく）

雪について

大下藤次郎

▽本年の御歌題は『雪中の松』である、松については昨年も一昨年も本誌上に講話があつたから今年も雪について其描法及心得をお話する。

▽雪月花といはれて雪は風流なものである、その白皚々たる光景は壯美であると共にまた極めて優美の觀を呈する者である、従つて古へより詩歌俳諧に歌はれ、同時に好畫題として畫家にも大に喜ばれてゐる。

▽雪は山によく水によく市街によく村落によい、常磐木の森に積れるもよく、枯木の林に銀の枝をつけるもよい、川沿の水の暗きに小舟のみ白く泛べるもよく、廣い野の道に二筋三筋轍の跡の残つてゐるのもよい、曉によく夕暮によく月の夜に殊によい。

▽詰らぬ景色も雪のためによくなる、穢ない場處も雪のために清淨になる、手もつけられぬ複雑な處も雪の爲めに面目を一新する、雪は風景畫家にとりて甚だ都合よき材題である。

▽雪の景を寫すには何よりも水彩畫が一番よい、油繪では初歩の人には雪の感じを出すのが困難である、白い紙の地を利用する水彩は確に雪景を寫すに適してゐる。

▽雪は色彩を明らかに見せるものである、今迄何色とも考へつかぬ庭の木の幹も、雪のために四邊が白くなりてその幹だけ明らかに見せらるゝために色がよく分る、白といへる地の領分ちが多くなるために個々の色彩は自然判明するのである。

▽雪は白いものと極めてはいけぬ、白いものは、やがて他の影響を受くることが多いもので、一枚の雪景圖に眞の白い處は唯一點よりはなひ筈である、光線の府、即ち視點に於てその明るき場處に白色を認めれば、認むることが出來やう。

▽併し多くの場合にこれさへ白色といふ事は稀である、若し天氣のよい朝なら、華やかな紅色の光線に包まれて雪は薄紅を帯びるであらう、そして其蔭影の部分は淡綠色になるであらう、若し中央の空が蒼色な

ら、空に面した蔭の雪はその色を反映してコバルト色を帯ぶるであらう。若し夕陽に對する時は、其向ふ處の面はオレンジに、其蔭影は紫色を含みて見ゆるであらう。若し空が曇つてゐたなら一體に鼠色になるであらう。白といふは比較上の言葉で、特に純白といふ處は殆どないものと見てもよろしい。

▽この故に雪は色彩の關係を研究するに尤も適してゐる、同時に濃淡の調子を調へることが甚だ困難なものである。

▽一番困るのは遠近の區別のつけ悪いことである、向ふの山も中景の屋根も前の畑も一面にただ白く見える、白く見えるから其儘ワツトマンの白を残して置たのでは、其繪は決して自然を見るやうに深く見えぬ、奥行がない、すると、自然の景色がただ一面に白く見えるのは誤りて、其間に必ず濃淡の相違があるといふことか分るであらう、これを正確に見出すのが困難である。

▽曇つた空に松に雪が溜まつてゐる、雪は白いもの曇つた空は鼠色のものと考へてゐると往々間違が出来る、試みに空へ突出した枝の雪を見ると、曇つてゐる空の方が明るく積つてゐる白い雪がそれよりも暗く見えることがある。

△燻つた羽目板、木の幹、常盤木の葉など雪の中では著しく暗く見える、これは元々そんなに暗い色ではないのが、雪の白いために際立つてそう見えるのである、此時雪を白いものとして中の地をその儘にして置て暗い處ばかり濃く塗る時は、平板になつて自然と違つたものが出来る、雪にも色のあることを見出して、雪の方をも暗くしてゆくと調子が整ふ。

▽雪の寫生には出来るだけホワイトを使用せぬやうにしたい、品のよい紙の地を残して置た方がよい、ホワイトの使用法がわるいとポテ／＼して綿のやうに見える、サラ／＼した雪の感じは出ない。

▽雪は多くの色彩に調和するものであるが、あまりよく晴れたる——雪のあした——の蒼空に、屋根などの白く輝いてゐるのは對象が強過てよくない、やはり朝か夕がよいやうである。

ら、空に面した陸の雪はその色を反映してコバルト色を帯ぶるであらう。若し夕陽に對する時は、其向ふ處の面はオレンヂに、其陸影は紫色を含みて見ゆるであらう。若し空が曇つてゐたなら一體に鼠色になるであらう。白といふは比較上の言葉で、特に純白といふ處は殆どないものと見てもよろしい。

▽この故に雪は色彩の關係を研究するに尤も適してゐる、同時に濃淡の調子を調へることが甚だ困難なものである。

▽一番困るのは遠近の區別のつけ悪いことである、向ふの山も中景の屋根も前の畑も一面にただ白く見える、白く見えるから其儘ワツトマンの白を残して置たのでは、其繪は決して自然を見るやうに深く見えぬ、奥行がない、すると、自然の景色がただ一面に白く見えるのは誤りて、其間に必ず濃淡の相違があるといふことか分るであらう、これを正確に見出すのが困難である。

▽曇つた空に松に雪が溜まつてゐる、雪は白いもの曇つた空は鼠色のものと考へてゐると往々間違が出来る、試みに空へ突出した枝の雪を見ると、曇つてゐる空の方が明るく積つてゐる白い雪がそれよりも暗く見えることがある。

△燦つた羽目板、木の幹、常盤木の葉など雪の中では著しく暗く見える、これは元々そんなに暗い色ではないのが、雪の白いために際立つてそう見えるのである、此時雪を白いものとして中の地をその儘にして置て暗い處ばかり濃く塗る時は、平板になつて自然と違つたものが出来る、雪にも色のあることを見出して、雪の方をも暗くしてゆくと調子が整ふ。

▽雪の寫生には出来るだけホワイトを使用せぬやうにしたい、品のよい紙の地を残して置た方がよい、ホワイトの使用法がわるいとボテ／＼して綿のやうに見える、サラ／＼した雪の感じは出ない。

▽雪は多くの色彩に調和するものであるが、あまりよく晴れたる——雪のあした——の蒼空に、屋根などの白く輝いてゐるのは對象が強過ぎてよくない、やはり朝か夕がよいやうである。



T. OSHITA
A-08

▽寫生の場處として何處として可ならざるはなしであるが、極手近な處にイクラもあるから、遠方迄出掛けるに及ばぬ、家の廻りの井戸端の一隅も面白からう、門外一步往來の雪もよい畫題である、狭い小路、橋の袂などもよく、河岸地にいろ／＼の物が積まれてあるその上の雪も風情のあるものである。寒くつて戶外へ出るのが厭なら、硝子窓越しに庭の松の木を寫すもよく、隣りの草屋根を描くもよからう。

▽不斷の雪を見る北國、または一度降つたらいつ迄も融けぬといふ寒國ではゆる／＼雪の寫生が出来るが、暖國で雪を描くといふことは甚だ忙しいものである、降り止んでからでは間に合はぬ場合もあるから何處かの軒下へ入つてやるつもりで降つてゐるうちから出掛けるがよい、東京近處では可なり久しく雪は地上にあるが、風のために樹枝の雪を寫すことが出来ぬ。

▽朝とか夕とか雪に色のある場合には、輪廓をとつて後ち直ちにその時の色で畫面全體を塗つて仕舞つて、それから細部分を描いてゆくと、大して調子に誤りがなく出来る。

▽雪の寫生の時注意すべきは眼を大切にすることである、それは輝いた雪などを久しく見詰めぬことで寫生中もたえず他の暗い處へ眼を轉して休息を與へねばならぬ、そして久しく同一の處を見てゐると、直感した現象が變つて寫生の目的を達し得ないことになる。

▽冬にあらざる他の季節に見る雪、即ち深山の雪や遠山の雪にいつては他日重ねて所感を述べることにする。(完)

雪を描くに、インヂゴ、バルト、レモンエルロー、カーマインは雪の色に使用し、ニユートラルチント、マダ
ーブラウン、パンダイキブラウン、アイホリーブラツク、オリユーヴグリエン、バントアンバーは、雪なき處
の色に用ひる。雪を見ると、單に白ばかりで、他の色彩を見出す事が難いものであるが、最も明なる色と影
とを比較して見れば、影の何色なるかを認める事が出来る。朝夕の日光の映ずるときは淡橙黄又は淡黄
となり影色は紫となる事がある(丸山晚霞氏『女性と趣味』の一節)

ナシヨナル、ギヤラリー

汀 鷗

ロンドンの National Gallery といへば巴里のルーブルと相對して世界屈指のものである、希臘風のくすんだ建物見かけは壯大ではあるが美麗ではない、併し一度其内に足を入れたら、たいくゞ茫然となるばかりで、アメリカで有難がつて見た古畫や、所謂英國人の作品といふものが今更馬鹿らしき迄に思はれた、こゝにある古今大家の作二千、それに對すると自分は畫家であると今迄よく人の前で平氣で言へたもので、自分の小なることがつくづく感ぜられる、少さいなら未たしも自分の存在さへ疑はれる、さればそれ等の名畫を批評するなどは思ひもよらぬこと、その好悪さへも二度や三度見たのでは言ふことが出来ぬ、こゝにはたゞ自分に忘れがたき深き印象を興へたものを少しく紹介することにする。

畫堂見物にはモ一馴れたもので、先づ入口でカタログを求め、番號の順序によつて巡つた。此畫堂は年代と流派とによつて區別され、歴史的に陳列されてあるため見てゆくのに甚だ都合がよい。第一室より第五室はタスカン初期のフレミツシ派の繪で宗教畫が多く、金色の光耀いたものもある、Antonio pollaiuolo のセント、セバスチアンの殉教といふ繪は、稍高き樹の枝の上に縛されて立てる裡體の壯夫を圍みて、六人の射手が銘々弓を手にして射殺する圖で、其作の良否よりも其畫かれし事柄の慘

酷なるには再び見直す氣も失せた。第六室にはアンブリアン派の繪がある、やゝ大なる室で、こゝには十五六世紀の大家の作が澤山ある、畫聖 Raphael の作も五點までも掲げてある、自分はラファエルの作については内心非常の尊敬の念を持つて居らなかつたが、今此畫堂に於て "Madonna degli ansideri" に向ふやあらゆる婦人の美德を湊合して成れる愛の化身マドンナの像に對して、自から頭が下つた、繪であるといふことさへ覺えぬ、況んや其枝巧色彩などは此際批議し得べきものでない、只々大なる感に撲れて恍惚たるのみであつた、聞く處によれば此繪を買入たる當時は十二萬磅の評價があつたとの事であるが、今は何程價格にや恐らく知るものはあるまい、かゝる貴重品は金錢にて其價を定むべきものではあるまい。畫聖の他の作のうちでは St. Catherine of Alexandria が忘れがたく思はれた。同じ室には Michael Angelo の繪がある、それは眞筆でないかも知れぬとの疑ひの符號がついてゐるが、自分にはラファエルの繪程に感を惹かなかつた Giovanni Battista Salvi の "The Madonna in Prayer" といふ繪も目に残つてゐる。

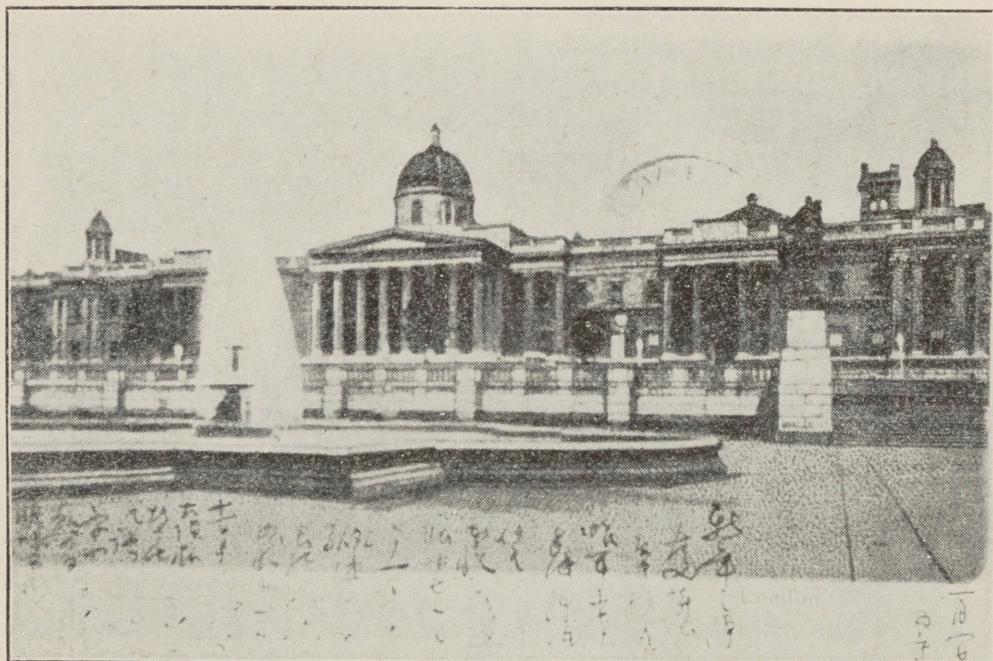
次の室にはベネシヤンスクールの Paolo Veronese や Titian などの美事なる作がある、ベニス派は色彩を以て他に優るもの、取わけチ、アンの繪には其精華を發揮してゐる。

第十、十一、十二の三室には、和蘭派とフレミツシユ派の繪で Rembrandt, Rubens, Vandyck を始め風景畫には Hobbema, Ruisdael 等の佳作が堂に満ちてゐる、ルーベンスの作には極め

て大なるもの多く、色彩の艷麗と其構圖の自在なるには驚嘆せ

るを得ない、こゝにある物のみにて

三十餘枚を數へられる、それが皆十疊
數程もある大作で、其達者なことは他
に及ぶものはない。レンブラント
の作も多くあるが、就中老婦人の肖像
は有名なものだけあつて、活々として
今にも語り出しそうである、曾てボス
トンで見た Dr. Niels 夫妻の肖像より
は一層活躍してゐる。ヴァンダイクの
作も大きいものばかりで、圖柄に變化
は乏しいが何となく高尚な色が多い。
ロルイスダエルの風景畫には水車溪流
瀧等が多く、調子の落ついた處は敬服
に耐えぬ。ホペマの Middel harnis 並
に Jan Vanoyen の山水畫等孰れも立
派な作で、今日の風景畫の基をなした
人達の筆と思へば、其製作以外に慕は
しい氣もされた。



ロンドン、シヨナ、ナヨル、ヤラリ

第十五室は日耳曼派の繪で、Hano
Halbein が代表者である、其正確なる
筆致は尊敬に値する。

第十六十七室の佛蘭西派の繪のうちな
る Claud Lorraine の風景畫は、十七世
紀の作としては感嘆すべきもの、ター
ナーの如きも此人より學んだ點が多か
らうと思はれる、此室にはなほ注目す
べき作が多い。

第十八室より二十一室迄は英國古代よ
り近世迄の繪畫で、コンステイブル、
コツプレー、ゲインズボロー、レイノ
ルツ等の他國では見られぬ大作が澤山
ある。レイノルツの The Infant samal
Kneeling at Prayer 其可憐な様子は、
生涯忘るゝことの出来ぬ深い印象を興
へられた Sir Thomas Lawrence の婦
人の肖像の優しさ、何を見ても驚くべ
きもの計りである、レイノルツ先生と
いへば最初の美術院總裁で、生徒を教
ゆるに理屈詰のヤカマシイ事を言ふ教

育家で、手腕は大したものであつてゐる。ムリロの繪

は傑出したもので場中特に光彩を放つてゐる。

度親しく其製作に接して、此人の理論と實際と相伴ふてゐることを知つた。次に Sir Edwin Landseer は有名な動物畫家であるが、其獅子のスタデー二面は殊に深き感動を起さしめた。Gainsborough の作は二十四枚あつて、孰れも大作、其人物畫は親むべし、風景畫には一種の形式があつて、今日の眼から見たら物足らぬ點も多いが、又學ふべき處は尠くない。John Crom の風車も美事な出來である。

第二十二室はターナーギヤラリーとの表札があつて、廣き室内は氏一個人の作で充たされてゐる、大作八十余枚、孰れも陸離たる光彩を放つてゐる。自分は白狀する、初めて此室に入つた時は呆然として何を見てゐるのか判らなくなつて仕舞つた、天才にあらざれば天才の作は解し得ぬものであらうと思つた、日本に居た時寫眞版や三色版で、ターナーの色がドーの感じがドーのと云つたるが今更耻かしくなつた、それと同時に、自分等と一しよに其作を親しく見せぬくせに、ターナーを品騰してゐた人達に一度見せてやりたく思つた。奇警なる自然の觀察、想像も及ばぬ其輕淡にして美はしき色彩、不可思議なる描法、何處を捕へて感心してよいのか、素養深からぬ身で初めてターナーの大作に接して、それがよく解されたといふ人があつたらそれは自から欺くものであらうと迄思つた、想ふにかゝる繪は看者の觀賞力に比例して其美術的價值を増すべきものであらう。階下には猶ターナーギヤラリーの第二第三の室がある、此處は皆水彩畫のみにて、スケッチやらスタデーやら大小六百餘點の

多數が蒐集されてある、密なるもあり粗なるもあり、何れを見ても氏の才筆と勉強の力の偉大なる事が覗はれる、世人はターナーを以て大なる天才なりといふ、併し此大なる天才は實に又大なる勉強家であつた事を忘れてはならぬ。

これにて國民畫堂の梗概は盡きた、このやうな大畫堂はいつ迄見てゐても又何度見ても飽きるといふ事はない、此樂園に朝夕自由に出入し得るロンドン市人は何といふ幸福であらう。

△ △ △

繪畫に於ける眞の新派は何派にある、西洋畫是なり。敢て問ふ、西洋畫はおのづから西洋畫なり、これをして日本畫の新派といふべきか。然り。西洋より傳へたるよりいへば、即ち西洋畫なり、繪の具の同じきよりいへば、即ち西洋畫なり。然れども日本人の畫くに至りては、既に日本畫なり。日本人の思想を發表するに至りては、既に日本畫なり。但模倣の域を脱せざるに於ては、未だ日本畫と成り了らざるのみ、鎔化陶冶、敵の銃砲を奪ひてわが有と爲せば、是れ元來の已が武器に同じ。繪の具の如きは萬國通有のもの。文學に於ける國語の墻壁と選を異にす敢て區々としてその異國に拘泥する勿れ、況や傳統の内外を論らふが如き死兒の齡を數ふるとをや。(文學博士藤岡東圃氏「日本畫の將來を思ふ」中央公論)

* * * * *

東京の彩料相場

繪具類は近來各商店に於て競争のため各種の繪具及紙類の價は大に下落したり、左に最近取調たる代價を記さん

竹見屋(神田區表神保町一番地)

一B印(フランス)小形チューブ各色共金五錢均一

一全大形は目下品切

一全乾製は色によつて價に相違あり一個十錢、十五錢、二十

錢、三十錢

一ニユートン製チューブも色により價に高下あり、一個十九

錢、三十錢、四十錢、但品數多からず

一全乾製は三十錢、六十錢、八十錢

一ワットマン紙1908年分一枚二十七錢

文房堂(神田區表神保町二番地)

一B印(フランス)小形チューブ各色共一個金五錢均一

一全大形品少し十八錢、二十五錢、三十五錢、五十錢

一全乾製色數僅少

一ニユートン製チューブ十九錢、三十錢、四十五錢、六十五錢、

一全乾製三十五錢、七十錢、一圓五錢、一圓四十錢

一ワットマン紙1908年分一枚三十錢

熊野屋(神田區小川町一番地)

一B印大形チューブ十二錢、十六錢、二十錢、三十錢、

一ワットマン紙1907年分(請合)一枚二十五錢

熊野屋には他の品はなし

以上

これで見るとフランスのチューブの小の方は、文房堂も竹見屋も同價、大の方は一番熊野屋が廉價で、全乾製は文房堂にもあるが價は粗ぼ同様ならん。ニユートンのチューブは竹見屋も文房堂も同價ではあるが、色によつては竹見屋の方が五錢廉い、全乾製は文房堂の方が竹見屋よりは五錢若くは十錢二十錢も高い。ワットマンは竹見屋が一番低價で、熊野屋の一昨年の分も保存がよいから斑點の出ることはない。

營業目錄は普通賣價が書いてあるので、各彩料店では地方の注文主に對しても、目錄に拘はらず時の相場て諸君へ送つてゐることと思ふが、地方の人は荷造料を出したり、送料を出したり、注文にも金が入用といふ次第で、都會の人より多分の費用が掛るのであるから、營業者は東京で賣るよりも一層勉強して貰いたいものである。

私は三月下旬頃まで東海道國府津驛富士見屋方に參り居候に付、至急を要する御書狀等はその方へ御差出下されたく候、尤も一週一回は必ず歸宅致候間、直接御用の御方は、土曜日午前十時より午後三時迄の間に、東京の宅へ御出下されたく候。

四十二年一月

大下藤次郎

米國理學博士田村哲氏は中學世界に於て『晴空の色』を説かれた、その説によると、日中と日没との區別が出来るが、晴天太陽の高く昇つた時は碧色透明なるが、太陽の附近と地平線に近い處だけ蒼色薄らぎ稍々紅橙色を帶ぶる、雨後の空色は非常に青く、海上は陸上よりも濃厚である、平地よりも高山の頂から眺めた方が空の輝きは減ずるが青みは濃い、世界中で晴空の最も青い國はまづ伊太利と日本であるらしい。

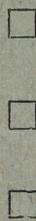
日没の時の太陽の有る方面は黄色を呈し、太陽から遠くなるに従つて紫紅色に移り、漸く遠きに從つて濃蒼色を呈す、この紫紅色帯をツアイライトといふ、ツアイライトは太陽が地平線下十八度に到る迄繼續するものである、日出の時には、晴空は日没の時と同様なれど現はれたる色の順序は反對に、慨して日没の時よりも色が薄い云々。

石井柏亭氏の『一方寸言』の一節に曰く

ビチユーム畫の月並、道路山水の月並、寺院の内部の月並、そんなものは過去になつたが、今又それに代る月並が出来てゐる。月並派の迷信の條々を數へ立てれば種々ある。彼等は鳶色を避けることが近代畫家の義務のやうに思つてゐる。墨は使つてはならぬと思つて、日本人の頭髮でも黒い衣服でも彼等は皆青く畫くのである。彼等は意味もなく日射に恐悅して、灰色の羽目板の光まで殊更に黄色にしなければ氣が濟まない。眞面目

といふことは面白くもない畫題に取付いて幾日も幾日も突つくことゝ心得てゐる。筆が働くのは輕浮と稱して、一圖に筆を鈍ぶらしめる。彼等は自然の濃淡の階級に勝手な變更を施すに慣れてゐる。色は成るべく眼に障らぬ様に心懸けて不透明色を愛用する。遠方の森には必ず空氣がかゝらなければならぬと思つて、粉つぼくしなければ承知しない。赤や黄や青の點々でこれ上げなければ空の深みと光とは出ないことゝ定めて居る。物との境界はぼんやり畫くものと思つて居る。余は之等のものを呼んで月並派の迷信と云ふ。

月並派の甘つたるいものゝ外に好奇の一群があつて、泰西畫の複製から思ひついた怪異の試みに世人を赫すことをのみ懸けて居る、其眞面目にして日本の自然を蔑視する點に於ては同一である、余は月並派の甘たるき「普遍」を避けて、而かも好奇派の怪に陥ることなく、自然の「特殊」を發揮せんことを欲する
(方寸)



穩健の議論と着實の筆とを以て常に家庭問題を指導せらるゝ羽仁吉一氏は、その主宰する『青年の友』を廢刊し、夫人もと子氏は、其編輯せる『家庭の友』を去りて、専ら『婦人の友』に向つて全力を傾注し、紙面を改め紙數を増加し、同誌をして更に一般家庭の眞實なる友ならしめん覺悟なりといふ(『婦人の友』毎月一回一冊十二錢、小石川小日向臺町二丁目羽仁氏方發行)

秋季寫生會第二日第三日

白 鷗 生

日本水彩畫會寫生會第一日の續きを御覽に入れやうさて僕等はTO先生と相原驛迄汽車の室を異にして乗つた、車中では随分騒いだSK君が室も破れよと許り琵琶歌を吐鳴つて乗合ひ客の肝玉を顛繰返したのは蓋しその随一であらう。

夕方にはTO先生及び二三子は歸られ、我々も皆三四枚のスケッチを得て旅宿車屋に立戻つた、たるんだ腹の皮が滿を張つて、楽しい旅宿の夜といふ領に這入た、藤島先生の謔ひの聲が別室から聞えたが、やがてやつてこられて羅漢廻しといふ遊戯を發議せられた、有志が十人許り揃つてやる、掛け聲、「羅漢さん／＼羅漢さんが揃うたらそろ／＼廻そじやないかスツチャレチャラチキチヤン／＼」各自が色んな形をして順に廻して往くといふ遊戯、間違へたものは隠し藝をするのである、かくて床に這入つたのは十時頃であつたが、くら暗の中でFO君が得意の咽喉を聞けよとばかりこわいろをうなるOJ君がはれ廻る中々に眠れなかつた。

いつの間にか落ちた熟睡から寐めて眞暗な室をゴソ／＼起き出て雨戸を少し繰開けて見ると有明の空には残る星がまたゝいて居る、時計を見ると五時半だ、顔を洗つてST君とKO君と一所に村の入口の方に往つた、川の方へは大勢往つた、今朝程綺麗な色を會て見たことがない、輪廓を取つて朝日の出づるを待

つて居ると、やがて雲間を破つて二十三日の朝日が照り出した、遠山の頭にホーツと日が當つて赤くなつて居る、近い山は影になつてコバルトその儘の色だ、オリーヴの松、カドミユームの楓、一時間許りは手足の指の千切れるやうな冷たさを辛棒して畫筆を採つた、宿に歸つて火鉢に早速かぢりついた。

八時頃車屋を出發、村はづれへ來ると永地、藤島、磯部先生等が寫生をして居られた、此處で一同KM君を煩はして寫眞を撮つた、永地先生等は寫生の爲め久保澤に残らるゝので別れを告げて淺川方面に向ふ。

初めの計畫では隧道を一つ抜けるといふ事だ、幹部からは三本の蠟燭を携へて來たのであつたが、村人に道を聞くと隧道を抜けるなんて非常な廻り道だから元來た道の方から往けといふ、又中間を取つて往けといふものもある、頗る迷はざるを得なかつた、近道をする人と相模川に沿つて往く人と二組に別れた、僕等は相模川の岸に沿つた水道の爲めに設けられたとかいふ途を上流へと進んで往く。

昨日に變つて晴れたる青空、紫の山、赭色の山、赤色の山、白い水、これらが可い調和をなして我々の前に忻然として横はつて居る、半里許り往つた所で三脚を据えた我々の居る所は水より五六尺高い所に居るから景色が大きい、此處で二時間許りやつて出發した、廻り曲れつた紅葉の道を往く事二里許り、下久保と謂ふ村に着いた、此處で道を尋ねて急な山路を登る、少し前へ登つた横濱支部の連中を大聲で呼びやら、苦しい思ひ

をしてやつとの事で頂上に着いた、此處からは遠くの方に相模野、名も知らぬ廻りの山々、遙かに富士山も見える、今し方歩るいて来た途は有るか無いかのやうだ、スケッチブックへ描き留めて山を降る、至つて樂な降り道を一里半程、淺川町の花屋旅舎へ着いたのは四時頃であつた。暗くなる迄少し間があるので流れにおりて岩を寫生した、水車を寫生するものもある、半ばならずして日はドツブリと暮れてしまつた。

夜は例に依つて繪葉書を描くもの、繪の修正をするもの、琵琶歌を迂鳴るもの様々である、隅の方では誰かの意氣な小唄が聞える、夫から又羅漢廻しをしゃうと早くから寝て店たFO君やHN君を引起して大に騒ぐ、仕舞には誰彼なしに隠し藝をするとなつて、色んな面白い藝が見られた。

明れば二十四日、寫生旅行は今日でおしまいである、矢張昨日のやうに皆未明に起きて思ひ／＼に出掛けた、僕は少し離れた町を寫生する、今朝は非常に寒い、寫生をして居ると丁度此前の大磯へ往つた時のやうに一筆毎にざら／＼と凍つてしまふ、可い加減に突つて宿に歸ると今描いた水畫が解け出して目茶になつてしまつて居る。

豫定では今日は八王子へ往つて其附近で寫生して其處から汽車で歸るのであるが、八王子へは往かずに此附近で寫生しやうと謂ふものが多數なので此處から汽車で歸るとに決定した、FO君とTH君と横濱の一人は宿屋の待遇が氣に入つたか何うだか知らぬがもう一日滞在するといふ、で朝飯が濟むと皆自分勝手な

所へ飛出してしまつた、僕はSN君YA君CM君と一所に町の水車を寫生した、描了るとひる頃になつたので茶店へ這入つて辨當を喰つた。

もう此町に居るのもあと僅に五時間の余、餘り緩りして居られぬと、其處を飛出して、小山の上へ昇つたが描く可きものがないので又溪流へ降りて、寫生をした、短かい日足は容赦なく傾く。急いで町の中に出て夕暮れの水車を寫す、手元が暗くなつたのでそろ／＼停車場へ往た、往つて見ると誰も來て居ない、はて面妖など其處らあたりを探すと角の花屋支店の中で、畜生めわい／＼騒いで居る、紅葉羊美や百合羊羹をかぢつて居る人もある。

五時五十一分には少し遅れたが我々は皆車中の人となつた、おさらばよ、暮れ往く淺川の町。

來る時となら人数は減じたが元氣は衰へぬ、羅漢廻しなどをやつて室中の乗客を驚かしたが、一時間半の後には紅塵萬丈の中の人となつた。(完)

○久保澤では薄團が不足で寒いとコホシてゐた人もあつたが中には下へ三枚も敷いて上へ三枚もかけたといふ横着者もあつた○髪の毛の長い人は外國人か支那人だらうと宿屋の女中共に怪まれた、あの聲からして日本人とは受取れぬ、あの歌も毛唐くさい○車屋はお茶代をやつたのに菓子も出さぬ、そして此家で觀世音を勸請して來た人も二人程ある○それは支那人か外國人かといはれた人ではあるまいか○宿屋で申受けた

のではなく前から拵合せでがたと云ふ人がある○花屋は氣が利いてゐる直ぐお菓子が出た○僕の方はこれてよいと言ふて早速懐ろへスツケチして仕舞つた氣の早い人も居た○湯に先へ入つて意氣揚々と出て来たはよかつたがお盆の上は煎餅の缺げばかり○淺川の羊羹は名物だけれど旨い(話にきいた人)

第二十二回師範學校中學校高等女學

校教員檢定豫備試驗問題 (承前)

▲圖畫に屬する國語問題(各五時間)

一 師範學校、中學校、高等女學校教員志願者は左の問題に答ふべし(第一種受験者の分)

講 讀

一、左の文章を正しく口語文にて解釋せよ。

吾人が特に二宮尊徳翁に推服する所はその人格の偉大なる點にあり翁が獨得の學識は、もとよりその一要素たるに相違なければども吾人は翁の自信力を以て主たる要素となさざるを得ず翁の自信力とは何ぞ荒蕪を開くに荒蕪の力を以てし衰弱を救ふに衰弱の力を以てすと云ふこと即ち是なり翁曰く荒田一反を開きその産米一石ならんに五斗を以て食となし五斗を以て本年の開田料となしかくの如くにして止まらずんば他の財を用ひずして何億萬町の荒蕪と雖も開き得べしわが神州開闢以來幾億萬の田畝を開拓したるも始より異

國の金銀を借りて然りしにあらざ必ず一畝よりしてかくの如く開けたるなりと何ぞその意氣の壯なる。

二、左の語句の中(甲)は其の意義を解釋し(乙)は其の讀みを示し(丙)は漢字に改めよ。

(甲)利益均霑 世襲財産 空前絶後 權謀術數 盤根錯節

(乙)雙六 生憎 蝶番 衣桁 敵愾心 依怙鼻負

(丙)のどか ついたて たなばた ごんごうだん いうしやうれつばい

文 法

一、いろは歌を片假名にて記せ。

二、左の文は如何なる意味に解せらるるか若し文意に曖昧なるとあらばこれを明晰ならしめためんがには如何に改むべきか君は富士山に登らるか

大阪府は河内和泉及び攝津の一部を管す

三、左の句の意義の異同を説明せよ。

見ず

見じ

見ぬ

見ざらん

見ん

作 文

わが家(普通文體)

女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者

は右の内講讀第二の(丙)及び文法の第三を除く(第二種受験者の分)

▲圖書(用器畫)科 (三時間)

注意 女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者に限り左の問題中任意に一問を省くべし。

一、圓錐と圓柱との相貫體を如何なる位置に於て投影せば其切斷線の正面圓が二直線を表はすか又其場合に於ける平面圖は如何

二、一邊一寸五分の正八面體を左の位置に於て投影せよ。

甲、八面の一が水平なる時。

乙、對角線の一が畫面に直角なる時。

三、任意の五角形を畫き其一邊に於ける一點を通して引きたる直線を以て五角形の面積を二、三、四の比に分割せよ。

四、東方に面し三十度の勾配ある丘の中腹を東北に走る小徑あり其勾配幾許なるかを圖解せよ。

五、直立せる方錐と横臥せる方柱との相貫體の圖を求む。

但錐の底邊は立畫面に四十五度傾き柱の長方面は畫面に四十五度傾き立體の軸の間には若干の距離あるものとす。

紹介

◎フランダースの犬

日高柿軒譯

東京巢鴨上駒込 内外出版協會

四六判百十頁 定價金二十五錢

英國の閨秀作家にして且動物の愛護者たるウイダの傑作にして『世界最良圖書百卷』の一に數へらるゝもの、編中には薄倅なる少年畫家あり、忠義なる老犬あり、クリスマス朝、雪中ルーベンズ畫聖の銅像の下に、永世の眠に入りし可憐なる少年畫家の半生を説くに笑あり涙あり、美術を愛するの士は一讀して此少年に同情を寄せられよ。

◎新年繪葉書 甲乙 各六枚二十五錢

東京本郷妻戀坂上 便利堂

中村不折、三宅克巳、滿谷國四郎、丸山晚霞、大下藤次郎、鹿子木孟郎、寺松國太郎諸氏の水彩畫を原色版にせしものにして新年とあれど必ずしも一月使用に限らず、また水彩畫の參考としても適當のものならん。

◎東京エコー 惡罵を以て本領とする丈けありて筆路痛快を極む、吾人は世道の爲め時に美術界の暗黒面をも指摘して貰ひたし(毎月二回、十錢、麴町有樂町有樂社)

日本水彩畫會新會友

京都市下京區八坂上町櫻井方

淺地松男

廣島市竹屋町

桐木信一

寄書

尾瀬沼號を見て

長谷川年行

臨時増刊尾瀬沼面白く拜見しました、口繪『尾瀬スケッチ』さぞ原畫は如何にと慕はしく思ひます、次號なり何時なり其一葉なりとも原色版として、遠き紀川の密柑黨の味より外に知りぬ私に是非／＼拜見して下さい。

尾瀬行當時の御旅行はさこそと偲び居るところ、記行を拜見すると趣味津々たるを覺えます。

中繪の八木氏の『湖畔の雨』森島氏の『自然の庭』赤城氏の『白樺』そのアツサリしたる妙手腕唯々感服、若き畫人の活動の御身の上戀しく慕しく懐かしく何とも角とも一種の感にうたれて恍惚たること久し。

ア、尾瀬沼、繪畫木版の四人の方のスタイルと見比べて思はず微笑を洩しました

關山瞥見

長野

B

K

世はおしつまりたる師走の下旬、小閑を得て越の關山に遊ぶ。車中に工女數名あり。血色なき顔、憔悴れたる容にも、それと知らるゝ彼等の境遇、殆ど機械視せらるゝ彼等の待遇に想ひ到りては、座に同情の念禁ずる能はざりき。傍に東京歸りの一學生あり。意氣銷沈、愁に堪えざるものゝ如く、うなだれたる頭

を擡げて太息吐く。久々にて家庭の人となり、新年を迎ふる樂しき歸省ならで、しかく彼を愁ひしむるはそも何物ぞ。失敗か病魔か果た何の懊惱ぞ。彼は窓に凭て卷煙草くゆらし始めぬ。我も亦車窓覗き、來し方を顧れば我家の方に高く光かるは雪の四阿山か。柏原よりは全く雪國に入りたるの感興湧けり。遙か左に屹然聳ゆる妙高の氣高き姿、白衣を纏ひて立てる聖者の如く、裳は長く地に曳きて褶襷、起伏蜿蜒、間々瘦枯槎々たる空林、暗黒莊重たる常盤樹、斷續並列せり、そが蕭條たる中にも、尙閑雅幽邃潔淨なる冬の趣致を觀得べく、亦躍々たる活氣の入を襲ふを覺え、飄々の寒風も山仙の奏する冬の曲と聞けば何のその暫らく此自然に恍惚として、今や自然に同化せしと思ふ間もあらず、身は早や關山に運ばれたり。

時は既に薄暮に近かりき。旅裝を改むる違もなく、用意の道具小脇に、よき處探り出さばやと彷徨ひ出でぬ。忽ち眸に入りしは暗褐色なせる杉の林、松も見ゆ。白装せる妙高の連山を遠景に、高く低く黄褐色の枯草に覆はれ見ゆる稻田を前景に早くも一枚のスケッチ我ブツクに収まりぬ。此杉を中景に位置更へて三度寫しぬ。水彩に色鉛筆に亦墨繪に。尙惑ひ歩む中に日脚短き冬の中とて日も西山の彼方に落ち、只山際の空わづかに黄橙色に明るし。平和ならずや此夕、模糊たる帷を透きて燈火點々、なぞ逸すべき此好景。

暫く去るに忍びずして低徊願望するに、早くも一種の靈氣我に迫るを覺えぬ。暮れ行く冬枯の野面に立てるは只縹渺たる妙高

と我のみ。彼に對せし其一刹那の我神！黄昏の寂寞に耳傾けし其瞬時！そも現身なるか？料らざりきかゝるインスピレーションの我胸に通はんとは。吾はしも今自然に直感せるなりき。我に歸れば、佇みし徑はわづかにほの白く弦月低く西の彼方に懸れり。空腹を感ずること甚しかりければ急ぎ宿に歸れぬ。

明日關山の町を徘徊す。四十餘年の往昔は越後街道の一宿、有繫に其面影は殘れども、今は只寂びれ行く世の態や。關山神社に詣る妙高の里宮とか、鬱蒼森なせる老杉、色褪せたる華表、頽廢せる社祠、皆よく變遷を語る。此地に來り實際を看て一驚を喫せしは、婦女のよく男子にも劣らず勞作に服することにて、豫れて聞きしに違はぬ越の風習、都人士等の觀なげ其奇異なるに驚くべし。家並の面白き所二ヶ所寫す。間もなく雨に追はれて宿に逃げ歸る。此日上り三番にて歸路につきぬ。車中に在りても尙彼地に在る如く、殊に遺憾なりしは音高き北國の雪景を觀得ざりし事にこそ。

尾瀨 沼

浪 華 浪 客

尾瀨沼といふ處が先生方の御紹介にて私共にもよく分りました繪を拜見してその絶景な場處を想像すると直ぐにもゆき度になりました、本文を読んで見て、私の尾瀨に焦れ尾瀨を慕ふ念は益々募りました。畫家未到の地、五夜の野宿の小屋住居何等の壯舉ぞや！それにつけても先生達の用意の周到なるには大に感服

致しました、鮑屠の蒲團は如何、私もいつか必ずその上に寝て、先生方當時の旅行を忍ぼうと思ひます、尾瀨ヶ原では末見の私も死んでもよい程美しい處として、毎夜夢に想像してゐます。私は改めて先生方のかゝる壯舉を敢てせられし元氣を喜び、其勞を謝するものであります、何卒此後もこのやうな臨時増刊を年三四回宛御刊行を願ひます。

誤 解

T K 生

水彩畫を見て、五十になる人と五十六になる人との間に、こんな會話が交換された

「フォーム俺達の時分には畫なんて事はチツトモ習はせなかつたものだが今ぢや何から何迄學校で習はせるんだな」

「そうさ、今はモウ何でも西洋でれ、畫でも昔は墨でサラ／＼とかいたんだが、西洋の畫は全て寫真だ、ツマリ本當の様に見ればよいので、筆の面白味だの雅だのといふ物は少しもない、ダン／＼是で進むて行つたら風流氣なんてものは、マルキリ無くなつてしまふだらうよ」

「だけど、是で重寶だ旅でもしていゝ景色が見付かつた時等は之を習つて置くと寫真器なんて要らない」

是は今起つた事實である僕は何とも言へなかつた。

* * * * *

じ候、讀者諸君のうち御賛成の方は本會へ御申込下され度候

近 事

△日本水彩畫會研究所に於ては、舊臘二十日月次會兼忘年會の催ありしが、本月第四日曜日には月次會の後盛んなる新年會を開き、種々の餘興を催す計畫にて目下準備中なりと

△麻布飯倉四丁目大日本繪畫講習會にては兼て便利部を設け彩料品の發賣をなせしが、今回ニューン會社より直接輸入を企て益々擴張して廣く需要に應ずる計畫なりといふ

編者より

◎函館間瀬生へ 君の繪葉書交換は君の宿所がないから出しても無益と思つて見合せました

問に答ふ

■一 印刷物に描ける樹幹道路建築物等を見るに頗る美麗なり、然るに僕が實景に臨

んで見ると非常に汚れたる觀あり、その儘に描かんか殆と見るに耐へず觀察の足らざる爲めにや又は斯くの如き時は色彩應用論などの描法を用ひてよきや自然を離れるといふやうなことなきや二 遠山等の肉眼的に見ゆる皺襞は主觀たらざる場合省略塗抹して差支なきや三 會友氏名は『みづゑ』第十五以來掲載あるものゝみにや(織田將一) ◎一 昔は繪を殊更に美しく畫いたものであるが近來はかゝる傾向殆どなし、印刷物は原色版でも小なるものは色が單純に現はれるため美しと見れば見られもすべし、極端なる寫實家は時に醜の方面のみを描いて是も自然現象なりといへど畫家は好んで醜き色を見るにも及ばざるべく、自然に美しい方に傾くならん、何でも自己の信じた通り色を出せばそれにてよろしからん二 小なる繪には細かき皺迄描くに及ばず大體の感じだけにてよけれど要するに程度如何にあること故満足な答へを誌上に示し難し三 然り、折を見て全會友の現住所姓名を掲出すべし 水彩畫階梯の口繪は何人の筆にや(間瀬生) ◎第一版は大下藤次郎氏第二

□昨年計畫せし特別讀者募集は、二十餘家の賛成ありて、製版印刷費等の値上げに揭

はらず、本誌をして幾分面目を改め候結果僅少なれ共讀者の數は約一割を増加致候

□本誌は其収入の全部を、一切編輯費に使用致候事故、収入の増加はやがて内容の善美を來すべく候間、希くは此際特別及普通

讀者の勧誘等奮て御盡力下されたく候

□本號口繪『燧岳』は、昨秋文部省展覽會へ出品せられし『深山の夏』の原畫にして、ワ

ツトマン九ツ切大に御座候

□小島氏の『ラスキンの山岳論』は四五回にて終了可致候、次號にはいよく其傑作『近

世畫家論』に就ての説明出づべく候

□『イースト氏寫生談』及び『色彩應用論』は猶一回を剩し居候、これまた次號に出すべく候

□別項廣告欄に有之候通り本會の丸山晚霞氏のため長野縣有志の催にかゝる畫會有之

候同氏の日本畫はその専門たる水彩畫の技倆に對して決して遜色あるものに無之と信

版の分は種々の人の執筆故圖柄を明記されれば御答出來ず ■一 透視畫法の參考書

二 投稿の繪畫に三色以内とあり同じ色にて濃淡ある場合は如何(山の人)◎一 平瀬

氏著用器畫法第三解説共三十八錢日本橋通

三丁目成美堂又は井汲氏著用器畫法第三解

説共三十八錢日本橋本町金港堂二 濃淡及

び掛合せ差支なし■一 油繪カンヴァスの

上に直ちに彩料を塗りてよきやカンヴァス

には下地といふもの必要なりや二 カンヴ

アスには直ちに輪廓を描きて後下地塗をす

るにや(兵庫MY生)◎麻布または帆木綿の

如きものにて自己で製造するなら下地が入

用なれど彩料店にて賣れるものにはその必

要なし、直ちに木炭にて輪廓をとり、その

上を墨若くは赤インキにて線を引き羽毛に

て木炭を掃ひ去れば、インキの輪廓残るべ

く、その上に繪具を持つてかくなり。尤も

或る派では、この時ある一色にて陰と日向

との區別を描き別け、後に着色すること

もあり■尾瀬沼號は殘本ありや、水彩風景

畫帖第一集も殘本ありや(KK生)◎前者は

澤山あり後者は十數冊を剩すのみ■着色後

色彩のさむるは如何なる爲にや(曉霞生)

◎水に潤ひてゐるうちは繪具が濃く見ゆれ

ど色が褪めるのは通例ですれ故經驗ある

人は少しづつ、初めから濃く畫きます

讀者の領分

■新年お目出たう本年も不相變一層親しく

自筆繪葉書の御交換を願ふ(東京小石川區

林町十二鹽島愛山)■一 相陽二葉氏の提

案なる繪畫交換は如何なりしや二 三宅氏

『旅行とスケッチ』繪葉書十枚と『みづゑ』第

一第六第二十と交換を乞ふ(廣島縣東城町

織田將一)■『みづゑ』第十九御不用の方は

全三十と御交換願ひたし(石狩國夕張郡

角田村福井善吉)■自筆水彩繪葉書の交換

希望(福岡市大名町六七筒井萬年)■カツサ

ン氏鉛筆臨本全部六十冊揃廉價十二圓前金

着次第讓與(下關市東南部町藤井直二郎)■

文房堂に目錄を請求せしも相當時日を経過

せしに何等の挨拶なし郵券没收の厄に逢は

ざるや讀者に注意す、迫て春鳥會に於て

特選繪具其他器具類の販賣御取扱を希ふ事

としては如何(神戸一寒生)◎丁度序ありし

故文房堂に注意せしにそれと覺しき方に二

三日延引ながら送付したりといへり、若し

未だ其手續を爲さぬやうなれば諸君に代つ

て大に筆誅すべく重ねて御一報を請ふ、次

に本會にては何分多忙なれば御取次は出來

ませぬ■弊店振替貯金は大阪六一五番に改

まり候間御承知置かれたく候(大阪市中の

島カ丁日吉村峰吉商店)■みどりの來春の會

月報の定價發行所並びにみどりの來春の新

年號目次内容等を知らせて頂きたい(高山

禎藏)◎みどりは二三ヶ月休刊してゐます

新年號と申て内容は不明これは會員組織で

會員外に雜誌を賣るか否か不明、事務所は

下谷區車坂町十七番地次に校友會月報は非

賣品で會員は東京美術學校の關係者に限り

ます■中澤さんの東海道五十三次の定價及

賣捌所、人物畫に關係した書物、それから

洋風美術家小傳がまだ残つてゐますか(お

尋れ生)◎五十三次はよほど前の出版故よ

く分らず發賣所は神田區小川町大野書店と

覺えたり、人物畫の書物と申て別になし、

美術家小傳は殘本二三冊はあらん

新刊 (十二月發行)

- | | | |
|-------|------|------------------|
| ■中央公論 | □心の花 | ■早稻田文學 |
| □美術新報 | ■寫真師 | □日本園藝雜誌 |
| ■日本美術 | □方寸 | ■教育學術實驗界 |
| □中學世界 | ■英學生 | □三越タイムス |
| ■帝國文學 | □新婦人 | ■文藝俱樂部 |
| □婦女新聞 | ■新潮 | □ハガキ文學 |
| ■介類雜誌 | □海軍 | ■明治の家庭 |
| □寫真月報 | ■文庫 | □教育公論 |
| ■亞米利加 | □寫真界 | ■實業の世界 |
| □歴史地理 | ■學燈 | □土佐圖書俱樂部 |
| ■家庭の友 | □歌舞伎 | ■東京エコー |
| □建築雜誌 | ■新公論 | □園藝の友 |
| ■商業界 | □小學校 | ■婦人衛生雜誌 |
| □農村時報 | ■貴婦人 | □少年パツク |
| ■婦人の友 | □音樂界 | ■東京美術學校
校友會月報 |

●定價、發行所等は本會へ問合されたし●

會告

■水彩畫に關する意見、展覽會、寫生會等の報導、其他美術に關する小品文等の投書を募る

■寫真版として挿入すべき鉛筆畫、一色畫、水彩畫等の寫真若くは繪畫を募る

■中繪として挿入すべき石版三色以内の圖案及び繪畫を募る

■文章は一行二十字詰にしてなるべく簡單に字體明瞭に認めらるべく、假名は平假名に限る

■投稿の繪畫及文章は一切返戻せず

■投稿の繪畫及文章にして本誌に登載せしものうち優秀なる作に對しては小水彩畫一葉を贈るべし

■初學者のために當分肉筆臨本を頒つ○肉筆臨本は一枚に付送料共金貳圓拾錢○圖柄及び畫幅の大小を指定する事を得ず○着金後二週間以内に送附すべし

■日本水彩畫會々友規定並びに同研究所規定は往復はがきにて本會に申出あれば送呈すべし

以上

『みづゑ』特別讀者を募る

美術雑誌の經營困難なるは、挿入すべき繪畫に多大の費用を要するに拘はらず、讀者の範圍の極めて狭きことなり、夫が爲め偶々雑誌の發行を企つる人あるも、收支相償はず忽ちにして廢刊の運命に到達するもの比々皆然らざるはなし。然るに吾『みづゑ』は、明治三十八年七月創刊以來幸に發行部數の如きも更に減ずることなく、事務、編輯、發送の末に至る迄皆一家内にて處理しゆくを以て、經濟の方面に於ても大なる痛苦を覺えず、これ皆寄稿家及讀者諸君の深厚なる同情の賜と、吾等同人の常に感謝する處なり。然れども、これたゞ現狀を維持するといふのみにて、吾等の理想に遠く、吾等が諸君に傳へんと欲する有益なる譚話、趣味ある記事、讀者諸君の面白き寄稿も毎月その大部分を剩し、諸君の清覽に供したき諸名家の水彩畫も又尠なからず、それ等の一片たりとも、より多く掲載せんには紙面の擴張を圖らざるべからず、然るに吾等の富はその不足を補ふべき連月の出費に耐えず、定價を改むるは多數の讀者と共に吾等の欲せざる處なり、依て同人協議の結果、特別讀者を募つて漸次『みづゑ』の發展を試みんとす、幸に賛成者十人を得れば二三の紙數を増し得べく、二十人を得れば更に一葉の繪畫を添ふことを得べし、これによつて吾等に幾分の繁忙を加ふるが如きは敢て辭する處にあらず、たゞ大方讀者に多少にてもふき雜誌を提供し得れば吾等の望足れり、希くは眞に水彩畫の趣味を愛し吾等の微意を知るの士は、速に賛同の意を表せられんことを 敬具

規

則

- 一 特別讀者は一ヶ年を一期とし、誌代一ヶ月金壹圓以上を拂込むものとす
- 但一時に數月分を拂込むも差支なし
- 一 特別讀者には毎月雜誌『みづゑ』一部を配布し、尙一期毎に水彩畫一點を頒つべし
- 但前記水彩畫の筆者は春鳥會幹部河合新藏、大橋正堯、丸山晚霞、眞野紀太郎、大下藤次郎諸氏にして筆者及圖柄共出來得る限り諸者の希望に應ずべし
- 一 配布すべき水彩畫には適當なる額縁を附すべし
- 一 中途拂込を怠りたる時は普通讀者と見做し、其拂込金額を振替へ單に雜誌のみを發送すべく、現金返戻の請に應ぜず
- 一 特別讀者は日本水彩畫會々友と同資格を有し自己作品の批評を受くるとを得べく、猶展覽會の自由觀覽其他の便宜を計るべし
- 一 特別讀者申込書には毎月拂込むべき金額及所望の水彩畫筆者及圖柄を明記さるべし

以上

東京市小石川區關口駒井町

春

鳥

會

振替貯金口座
六九六參番

謹賀新年

◎ニュトンの製品よりも分子微細、色澤豊富にして永久變色の憂ひなく
容量亦稍大なる

ラファエル(美術家用)水彩繪具(色數廿五色)

普通色二十錢 中價色三十錢 高價色四十五錢

◎現在日本に輸入せらるゝ各種の學生用チューブ入よりも品質確かに
優等にして容量亦稍大なる

ニュトン(學生用)水彩繪具

(色數四十種 七錢均一)

時運の要求により品質優秀なる水彩繪具を供給せんが爲に特に新たに提供せる右二品盛んに御愛用を乞ふ
御注文は可成各地の賣捌店へ御用命願度萬一賣捌店なき地方の方へは五個以上當分運賃自辨にて御郵送可
申上候
郵券貳錢封中御申込の方へ洋畫繪具及附屬品一式の圖入定價表一部を呈す

京都寺町二條

ウキリアム、ラファエル
ダブルユ、ニュトン 日本代理店

森親子商會

電話二千百廿四番

賣捌方御希望の方へは特に御相談可仕候

◎『みづゑ』讀者諸君に限り當分の内定價壹割引にて差上可申候

丸山晚霞氏千畫會

趣旨

我信州出身ノ洋畫家丸山晚霞氏ガ、曾テ、歐米漫遊ノ途ニ上リテ、斯道ノ蘊奧ヲ究メ、現今、本邦水彩畫界ノ泰斗トシテ、聲名アルハ世ノ既ニ知ル處ナリ。會々、氏第二二次海外留學ノ志アリ。發程ニ先チ共進會協賛會東京支部委員トシテ、繪畫展覽會ノ要務ヲ帶ビテ長野市ニアリ。揮毫ヲ囑スルモノ門ニ相踵ギ、座ニ絹本畫帖ノ堆キヲ見ル。而モ畫家ガ一々客ト相見エテ、座談ニ時間ヲ空費スルハ、製作ニ忠實ヲ缺ク虞ナキニアラズ。吾人平生氏ト厚誼アリ。此際、一ハ以テ、氏ノ繪畫ヲ希望スル人々ノ便宜ヲ圖リ、一ハ以テ、氏ヲシテ全力ヲ傾注シテ製作ニ從事スルノ機會ヲ多カラシムベク、玆ニ氏ノ承諾ヲ經テ、其ノ千畫會ヲ組織シ、廣ク同好ノ諸士ニ對シテ嗜好ノ満足ヲ圖ラントス。要、趣味ノ普及ニアリ。若シ夫レ作畫ノ如キ、氏ノ人格ト手腕ト地位トヲ以テス。寸紙半絹、猶且ツ美ノ眞價ヲ發揮スベキモノアルヲ信ズ。規定別記ノ如シ。切ニ大方ノ賛助ヲ仰グ。

明治四十一年十一月

發
飯島保作
飯岡正治
馬場賢次
羽田定八
花岡次郎
堀内賢一郎
大原里靖
大山綱昌
大里忠一郎
大澤辰次郎
大井富太郎
小里賴永
小野榮左衛門
渡邊千冬
片桐武三
神津猛
上條謹一郎
勝山直久
立川雲平
瀧澤漸
南條吉左衛門
起
上柳喜右衛門
潮惠之輔
井出善一郎

人

工藤善助 黑澤鷹次郎 柳澤禎三
山本慎平 丸山盛雄 增子德之助
福澤泰江 小出八郎右衛門 兒玉彦助
小部鶴太郎 荒井廣治 小島相陽
阿部四之助 箕輪五助 佐藤誠
佐藤喜惣治 鹽川賢三 宮澤長治
水品平右衛門 平林歡次郎 清水有國
下村龜三郎 鈴木庄之助 平野桑四郎
鈴木小右衛門 (姓名いろは順)

規定

一、水彩畫家丸山晚霞氏の作畫を頒布するを以て目的とす
本會に於て頒布する作畫は一千枚を限る

一、二、三、四

一、畫題は風景及び花卉の二種とす
作品の種類及び畫料左の如し
一軸金拾圓
一面金拾圓
一、絹本軸物 (尺五、絹表裝箱入)
二、絹額本面 (金地銀表裝縁付)
三、水彩畫 (パロイソングレー)
一面金貳拾圓

五、六、七、八、九

但し注文ある場合は此制限以外とす
希望の畫題を申出らるべし
希望申込者は先ツ裝幀代として内金三圓を前金にて仕拂ひ作畫引換に殘金を支拂はるべきと
製作期限は明治四十三年二月十一日とし隨時展覽會を開催す
可成全部製作の曉にあらざれば頒布するを欲せざるも特種の事情ある場合は此限に非ず
理事は會計其他の事務を監督し幹事は實務に當るも
手紙にて申込まるは向は長野市長野新聞社傳田清作若くは同市信濃毎月新聞社福山壽久宛にて申込金三圓を添えて希望の畫題作品種類等詳記の上申込まるべし

理事 堀内賢郎 小島相陽 宮澤長治
幹事 傳田清作 池田長治 小林龜吉 福山壽久

『みづる』讀者ノ御申込ハ春鳥會ニテ取扱フベシ
(振替貯金東京六九六三番)

(後付四)

る な 細 詳 入 圖

來 出 錄 目 新

錢 四 稅 郵

錢 拾 費 實

新 年



謹 賀

ハ 錄 目 略 品 用 畫 洋

ス 呈 へ 方 御 〆 附 送 御 錢 貳 稅 郵

械 器 圖 製 具 房 文 米 歐

料 材 及 具 繪 術 美

型 模 膏 石 及 品 用 型 模

賣 販 造 製 入 輸 直

堂 房 文 田 池

番 地 貳 町 保 神 表 區 田 神 市 京 東

番 七 九 四 四 座 口 金 貯 替 振 便 郵

番 四 一 三 局 本 話 電

(後付五)

方寸

繪畫要目

廣告書

種粒撰

蜻蛉息

題未定

全上

高砂の松

湯ヶ野の宿

方寸言

波高き日

談片

寸管録

方寸畫曆

發行

四錢 十二月二十日

刷一部二十錢郵税

四六版變形石版色

柏村亭 瓢破生

高田村 敏氏

上田 空太郎

木下 空太郎

山本 空太郎

中澤 弘光

磯部 忠一

森田 恒支

石井 柏亭

山本 白亭

倉田 白亭

莊野 宗之助

阪本 繁次郎

淺井 エレ

シエレ 忠一

故

第三卷第一號

四十二年一月發行

一部特價十五錢

郵税二錢

發行所

方寸社

東木 京木 本林 郷町 區八 駒番 込地

(後付六)

■大下藤次郎著『水彩風景畫帖』第一集殘部少々あり
一部送料共割引金三十錢

■大下藤次郎著『水彩畫階梯』初版上製の分表裝の銀
模様や、變色せしもの一部送料共割引金三十四錢

■みづゑ殘本三十八號以前の分十冊以上一時に御注
文の方へは一部送料共金十錢の割にては送付致すべ
し但第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、
第九、第十、第十一、第十三、第二十は品切其他の號と
雖も殘部極めて僅少のものあり至急御注文を乞ふ

東京小石川區關口駒井町 春鳥會

振替貯金口座東京六九六三番

■振替貯金にて御送金の節は手数料金貳錢御加へ下
されたし

方寸社同人合作にして曆の形式を加たる畫
譜也

寫真例題集 合同發展廣告

寫真家畫印刷業者間に於て有名なる寫真雜誌「寫真例題集」と「寫真界」は當春一月號より合同の上左記條項の基に一大發展せんとす尙此誌に就き其詳細を熟知せられたし

一 改正「寫真界」の紙副、六寸に八寸五分

一月刊發行日、一日

一同内容、口繪コロタイプ五葉記事五十頁以上

一 定期増刊、年四回一、四、七、十月

一同發行日、十五日

一同内容、挿入印畫コロタイプ十葉、記事十頁以上

一定價、前金割引、合計割引代價等下記通

合 計 割 引	定 期 増 刊		月 刊		冊 數	代 價	郵 稅	合 計
	一 冊	一 年	一 冊	一 年				
十六冊	一冊	一ケ年	一冊	一ケ年	三	三十錢	二錢	三十三
三圓八十錢	三十錢	一圓	三圓	三圓	三	三十錢	二錢	三十三
卅二錢	二錢	八錢	廿四錢	廿四錢	三	三十錢	二錢	三十二
四圓十二錢	三十二錢	一圓〇八錢	三圓廿四錢	三圓廿四錢	三	三十錢	二錢	三十二

▼改正後の月刊「寫真界」第四號第一號、一月一日發行。
 其内容の大略を掲ぐれば、口畫には精巧なるコロタイプ印畫五葉を挿入し本欄には岡田理學士、熊木、谷等各氏の外更に斯界知名の氏に依囑し、講演、雜錄、會報、批評等の各欄は記事を一層擴張し同志各位の參考資料に供すると共に倍々趣味を豊富ならしめんとす
 ▲定期増刊「寫真例題集」第七十三卷、一月十五日發行。
 其内容の大略は去秋大阪に開催の浪華寫真俱樂部第三回展觀會の優等印畫を蒐集し是を精巧なるコロタイプ印畫に附し十葉の挿畫となし、記事には大下先生の「構圖に就て」と題せる論文、出品物目錄、出品物批評等を添ふ

大阪市心齋橋通

發行所

桑田商會

振替貯金 大阪四五五番

東京日本橋人形町

賣揃所

岡本寫真店

●日本水彩畫會研究所は新築教場に於て毎日午前、夜、毎週日曜日終日授業すべし

●研究所は小石川小日向水道端町二丁目十六番地（服部坂下通り、電車江戸川線水道町停留場より一丁）にあり

●日本水彩畫會研究所安中支部は群馬縣安中町根岸方にて毎月一回授業すべし、講師は河合新藏、丸山晚霞兩氏にして専ら戶外寫生をなす

●日本水彩畫會研究所横濱支部は神奈川縣程ヶ谷小學校内にあり、授業は毎月第一第三日曜日にしして講師は大下藤次郎氏なり、講話及戶外寫生をなす

●日本水彩畫會研究所には地方講習生の設あり、丸山晚霞氏主として通信授業をなす

本誌規定

發行日

毎月一回 三日

定價

一冊送料共金拾八錢、三冊金五十二錢、六冊金一十冊金一圓六十錢、見本一冊郵券にて金拾錢但號數の指定に應ぜず

會友

一時に金拾五圓以上を拂込むものには本會々友として日本水彩畫會々友と同一の待遇を與へ本誌の無料配布を受くる事を得

送金

前金のほか一切送本せず○前金切の時は包紙に注意すべし○代金拂込は振替貯金を望む但一回毎に必ず登記料金二錢を拂込金に加ふべし○本會振替貯金口座番號東京六九六三番○郵便爲替拂渡局は必ず東京小石川小日向水道町郵便局○郵券代用は必ず一割増

注意

代金の受取證を要するものは返信料を送れ○住所姓名を明記されたい○注文の際は第何號よりと明記されたい○御照會を請ふ○切前月十日

廣告料

明治三十八年六月二十九日内務省許可
明治四十一年十二月廿五日印
明治四十二年一月三日發行

(第四十六)

編輯兼發行人 大下藤次郎
東京市小石川區關口駒井町三番地

印刷者 藤本兼吉
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所 春鳥會
東京市小石川區關口駒井町三番地

(後付の八)

